

「産業遺産について思うこと」

四国経済連合会副会長（住友金属鉱山株常務執行役員別子事業所長）

千田 悦



高速道路の値下げやテレビドラマの影響で、四国の食・観光が賑わっています。これを機に四国の経済活性化・認知度のアップが大いに期待されます。四国4県の名前や県庁所在地を全て知っている人は大変少ないことを過日聞いてびっくりしました。

当社事業所のある新居浜市でも別子銅山から発展した住友グループの産業遺産の数々が観光に生かされるようになり、密かなブームとなっています。（やや轟然目かも？）

特に昨年からは別子銅山の貯鉱舎跡の景観を「東洋のマチュピチュ」と冠した観光ツアーが売り出され、県外から多くの観光客を呼び込むまでになって来ました。国の登録有形文化財にも住友関連の旧施設を中心に既に8件登録されているなど、新居浜市は産業遺産の宝庫になっています。また、昨年、新居浜南高校が、「山・浜・島 あかがねの道ツアー」と題して別子銅山を中心にした産業遺産を題材に観光プランを提案し、「第一回観光甲子園」で準グランプリを獲得したのは記憶に新しいところです。

一方、産業遺産はその名の通り企業の過去に稼動した施設であり、手を入れなければ朽ち果てていくのは必至です。企業にとっての経済論理からすると、もっとも効率的な「始末」を考えざるを得ません。各地にある多くの産業遺産もこうした洗礼を受けながら残っ

たものが主だと思います。昨今、長崎の軍艦島（端島）も廃墟ブームで人気があるようですが、あのような保存状態（保存しなかった）を批判されても困りものです。新居浜市では行政・地域の活動で産業遺産の保存・活用が進められていますが、こうしたやり方が産業遺産を生かす良い方法であると思います。また、費用対効果という面から見ると、何から何まで残すのではなく、一定の青写真をもとに保存対象を考えていくべきでしょう。跡地と写真だけでも想像力がかきたてられます。

新居浜市を中心とした住友関連の産業遺産は現在使われていない鉱山施設が主でありますが、今も操業を続けている工場の周辺にも存在しており、一般の観光に開放するのは困難なものがあります。こうした資産を今後どう保存・活用すべきか大変悩ましいところではありますが、企業の立場（安全等のリスク対応・保存費用等々）も理解していただく中で、地域との共存共栄をベースとして良い方法を見出して行きたいと思っています。

今後、日本の近代化を支えた先人の想い・実践を学習する観光地として、また、決して一過性のブームに終わらない観光地として、存在感のある産業遺産の街づくりを支援していきたいと思っています。皆さんも是非一度、密かなブームの内にいらしてください。